

【2015年文化の越境とジェンダー国際シンポジウム in 上海 基調講演 要旨】

日本語の和語・漢語・外来語から考える：  
文化の越境とジェンダー

佐々木瑞枝

1. 和語と漢語の違い

一昨日の件、再度の検討が必要です。(漢語が主体)

おとこのことですが、もう一度話し合った方がいいと思います。(和語が主体)

上の二つの文の違いについて公的か、私的か、話し手のジェンダーは、などの点について考えてみよう。

2. 和語

古来より話し言葉として日本語の中に存在していた。漢字で書く場合は訓読みする。『日本霊異記』(成立は5世紀後半から822年)の上巻28に「倭語」「倭」が出現する。

- 9世紀には、外国語と対立するワゴという概念が存在したことになる。人々は「和語」を使って会話し、大事な約束事や社会的なルールも和語によってなされていた。
- 本居宣長は「源氏物語玉のおぐし」の中で、『竹取物語』が物語の祖であることについて、次のように述べている。「この竹取や、はじめなりけむ」(『竹取物語』は和語で書かれている)。
- 『竹取物語』が書かれた当時は、公的文字としては漢字漢文が使われていた。特に男性の知識階級は口語表現とは異なるこれらの漢文を使っていた。

3. 漢語

呉音・漢音・唐音など、中国から日本に入って来た時代によって読み方に違いはあるが、(中国から入って来た)言葉で音読みする言葉。

- 「17条憲法第一条」

以和為貴。無忤為宗。人皆有黨。

亦少達者。是以或不順君父。乍違于隣里。

然上和下睦。諧於論事。則事理自通。何事不成。

一に曰(い)わく、和を以(も)って貴(とうと)しとなし、忤(さから)うこと無きを宗(むね)とせよ。

人みな党あり、また達(さと)れるもの少なし。ここをもって、あるいは君父(くんぷ)に順(したが)わず、また隣里(りんり)に違(たが)う。しかれども、上(かみ)和(やわら)ぎ下(しも)睦(むつ)びて、事を論(あげつら)うに諧(かな)うときは、すなわち事理おのずから通ず。何事か成らざらん。

漢語は口語としては同音異義語が多く、口で伝えるには不向きである。口語としては和語が圧倒的に力があり、また漢語が公的な文書として用いられる時代にあっても、和語は『万葉集』『祝詞』『古事記』『風土記』などに用いられている。

下記の例から、平安時代の貴族階級の女性にも漢語が学ばれていたことがわかる。

- 紫式部の清少納言批判

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり。かく、人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行末うたてのみはべれば、艶になりぬる人は、いとすごうすずろなるをりも、もののあはれにすすみ、をかしきことも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるにはべるべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよくはべらむ。(『紫式部日記』より)

(現代語訳)

清少納言という人は得意顔をして偉そうにしている。あれほど利口そうに漢字を書きちらしているが、よく見ればまだ漢字の知識の及ばない点が多い。自分は人より抜きん出ていると勘違いし、そのように振る舞う人は、おそらく後世、(以下略)

紫式部は、清少納言が漢字の知識をひけらかしているといった嫉妬とも解釈できる文章を日記に書いている。しかし、実のところ、紫式部自身も漢字の知識があるからこそ、日記にこのような文章が書けるのであり、漢字・漢語が貴族の女性たちにも浸透していたことがわかる。

- 清少納言の漢語の知識

夜をこめて鳥のそら音ははかるともよに逢坂の関はゆるさじ

百人一首にある清少納言の歌も漢籍の素養が活かされたもので、この一首を贈った相手は藤原行成であった。清少納言が行成と物語をしていた夜、帝の物忌(ものいみ)があるからと、行成は途中で帰ってしまう。翌朝、行成から「昨夜は鶏の声にせきたてられてしまつて」という言い訳のような手紙がくる。そこで清少納言は『史記』の故事を踏まえ、「夜更けの鶏の声とは函谷関(かんこくかん)のことかしら」と返す。

中国の『史記』の故事を引用して、返歌をする清少納言のほとぼしる才気が感じられる内容である。

現在、辞典などの漢字の収録語数は8万字を超える。(『大漢和辞典』)、また、日本、中国、台湾、韓国、ベトナムの漢字150,366字のデータを収めている市販ソフトまである(『今昔文字鏡15万字版』)。

今後、漢字の組み合わせにより、どのような新たな語彙が誕生するのか楽しみである。なお、日本で一般の社会生活で必要とする「常用漢字」は2136字に過ぎない。

#### 4. 外来語

主に欧米から移入された言葉で、日本語ではカタカナ表記される。外来語はジェンダーに関してはニュートラルと言える。

三省堂のコンサイスカタカナ語辞典には、4万5千語もの外来語が掲載されている。和語では「宿屋」、漢語では「旅館」、そして外来語では「ホテル」と、同じ宿泊施設を表すにも、現代では和語、漢語、外来語の使い分けがある。この中ではホテルが近代的で清潔という印象を与える。なぜ外来語、それも英語が人々に洗練された印象を持たせるのだろうか。

外来語が急速に増加した時期は、明治の文明開化期と第二次世界大戦後である。日米間の経済や政治の上で日本はアメリカと強く密着し、英語が常に「自分より一歩進んだ国」「追いつくべき存在」の象徴そのものだった。現在、雑誌や店の看板では、和語が復活の兆しがあるにもかかわらず、ファッションの分野では、英語やフランス語からの借用語(外来語)があいかわらず多用されている。

日本になかった新しい概念が導入される時も、外来語で表現する。たとえば、患者の権利を尊重する動きとともに「インフォームド・コンセント」「セカンドオピニオン」という言葉が輸入された。

また、もともと日本にあった現象についても、それを言い表す適切な表現がそれまでなかった場合、その表現が輸入されて使われることで、その事実が人々に広く認知されることもある。「セクシュアル・ハラスメント」「ストーカー」「ドメスティック・バイオレンス」などである。

中国では日本語のように外来語をカタカナで表すという表記法が存在しないため、サンスクリット語が経典とともに導入された際、「アミーバ」の発音が音訳されて「阿弥陀」と漢字で表された。それらは、漢語としてそのまま日本に伝わっている。

日本人の意識の底にある、西洋文化への崇拝が明治以来から遺伝子のように引き継がれているというのは言いすぎであろうか。少なくとも外来語が多用されているパソコンの雑誌、ギターなどの音楽用語、部屋のコーディネート用語、若者向きの雑誌、そしてスポーツ用語と、外来語使用が高い比率を占める雑誌は全て、外国から輸入された概念をもとに書かれているものが多く、しかもそれらの概念のほとんどが英語からの借用である。

これらの語彙は、話し言葉にも書き言葉にも同様に使用できること、語と語の組み合わせがしやすいこと（例：プールサイド）などの理由により、ますます数が増えて行くものと思われる。原音とは異なる「開音節化」されたカタカナ表記による外来語は、徐々に日本語の中で「外来語」と意識されないようになっていくのではないかと思う。

#### [参考文献]

- 市古貞次他編集『日本文化総合年表』岩波書店 1990年  
国立国語研究所『現代雑誌90種の用語用字』秀英出版 1963年  
佐々木瑞枝『外国語としての日本語』講談社現代新書 1994年  
佐々木瑞枝『日本語なるほど塾』NHK エデュケーショナル 2005年  
佐々木瑞枝『日本語を外から見る』小学館 101 新書 2010年  
佐和隆研編『仏教図典増補版』1990年  
林大監修『図説日本語』角川書店 1982年  
文字鏡研究会編『今昔文字鏡 15万字版』操作マニュアル  
森拓也『日本の漢字 1600年の歴史』ベレ出版 2011年

(ささき みずえ・武蔵野大学名誉教授)